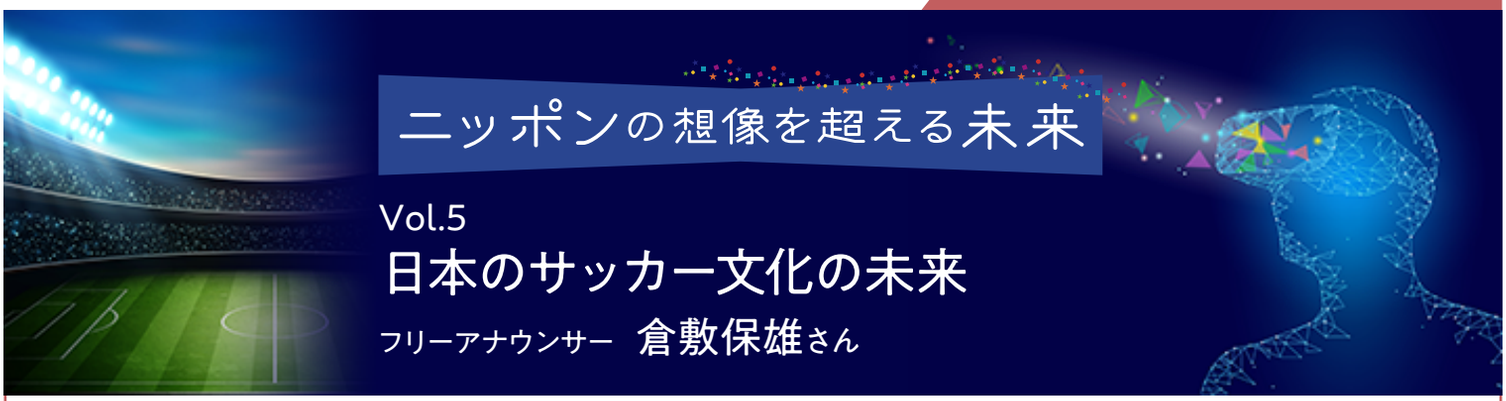

ニッポンの想像を超える未来

Vol.5

日本のサッカー文化の未来

フリーアナウンサー　倉敷保雄さん

サッカーは世界につながる入り口

ラグビーワールドカップの開催でラグビー熱が急上昇した。日本ではスポーツはひとつの大きなイベントをきっかけに、爆発的な人気になることが多い。しかし、世界に目を向けると、その国の歴史や文化、風土によって、好まれるスポーツは異なる。では、世界のどの国でもメジャーなスポーツはあるのだろうか。それがサッカーだ。世界中にプロアマのチームがあり、専用スタジアムも多い。老若男女を問わずに熱狂的なファンがいるのもサッカーの特徴だ。

日本では、1993年に日本プロサッカーリーグ「Jリーグ」が開幕した。時を同じくして衛星放送が始まり、CSのスカパーやBSなどで海外のサッカーリーグを中継する番組がスタート。サッカーが世間に認知されてファンが急増し、サッカークラブなどに通い始める子どもが増えた。それから25年以上経った今、各地域に根づいたクラブチームが存在し、サッカー文化が定着しつつある。

今回は、圧倒的な知識とオリジナリティあふれる実況でサッカーファンから厚い信頼を寄せられる、フリーアナウンサーの倉敷保雄さん（愛称：クラッキー）に、生活に根づいた文化であるサッカーの未来について、お話を伺った。

サッカーといえば、『ゴーーール』と絶叫する実況がおなじみ。実はこれは、ブラジルから入ってきた中継スタイルだ。

「日本のサッカーはブラジルから学んでいることが多い。実況スタイルのほかに、応援スタイルもそう」と、倉敷さんは話す。しかし、そのわりにはブラジルサッカーで使われている用語や考え方は伝わっていないと感じた倉敷さんは、実況で、チームや選手の背景をはじめ、その国の言語も使い、その国のサッカー文化を紹介するようになった。

倉敷さんが最初に担当したのは、オランダリーグ「エールディヴィジ」とブラジルリーグ「カンピオナート・ブラジレイロ・セリエA」の中継。その国のサッカーを知るために言語と文化を徹底的に勉強して現地の言葉で取材をし、面白い用語は日本語も交えて紹介した。以来、新たなチームの試合を担当するたびに、その国の言語から文化や生活習慣までを勉強。「一時期は、10カ国語の辞書を持っていた」と言う。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

そんな倉敷さんがほれ込んだサッカー文化がある。スペインリーグ、リーガ・エスパニョーラのチーム「アトレティコ・マドリード」。特に2017年まで使われていたホームスタジアム、エスタディオ・ビセンテ・カルデオンでのサポーター文化だ。
「ここのサポーターはチャント（応援歌）を30曲くらい持っている。しかも歌詞が多い本当に歌のようなもの、試合の局面によって、曲を歌い分けているのだが、それはスタジアムで自然にわきあがってくるもの。その迫力はまるで劇場のよう。こんなスタジアム、サポーターがいるんだと感動した」。

エスタディオ・ビセンテ・カルデロン

もうひとつ、倉敷さんがこれこそサッカー文化の成熟した形と称えるのが、イタリアリーグ、セリエAのユヴェントスFCのスタジアム「アリアンツ・スタジアム」だ。

アリアンツ・スタジアムは、フランス国境に近い、北部のトリノという街にある。イタリア初のクラブ所有のスタジアムとして、2011年に完成した。「スタジアムの周囲にはショピングモールがあり、観戦の前後に買い物をしたり、レストランで食事したり、家族で1日中過ごせる。サッカーを観戦しない人も楽しめる娯楽のオールインワンを作ってしまった」と倉敷さん。さらにユヴェントスのすごいところは、スタジアム内部のホスピタリティにあるという。

「スカイボックスというガラス張りの貴賓室のほか、椅子の背もたれにパーソナルモニターが付いているボックス席がある。サッカーに詳しくない人は、モニターの画像を参考にすれば、試合の流れが分かる」。

スタジアムの管理にも感心したと、倉敷さんは続ける。「アルプス山脈がそびえる寒い地域なので、太陽の日差しが届きにくく、芝の成長も遅い。そこで、スタジアムは巨大な扇風機で空気をかきまぜ、太陽の日差しがしっかり入るように設計されている。中継のためのカメラの設置場所も迫力がある映像がとれる位置を計算されている」。サッカーをより迫力ある娯楽になるようにしかけたアイデアが満載なのである。

ユヴェントスは、ホームスタジアムが完成してから、それまで落ち込んでいたクラブ収益が倍以上に上がった。さらには、スタジアムを中心にさまざまな施設の建設が進み、街ごと生まれ変わっている。「サッカーを通してさまざまなものを巻き込み、街を活性化させた理想形」と倉敷さんは話す。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

サポーター文化の違いを認めて実況していくことがメディアの仕事

もともとサッカーが世界に広がったのは、宗教に通じるものがあるそうだ。「川があるとそこに人が集まりコミュニティができる。そして教会ができ、次に娯楽が生まれる。その娯楽として始まったのがサッカーで、宗教と共に世界に広がった」と倉敷さんは説明する。

それに対して日本のサッカーは異なる広まり方をしている。「国内で一気に認知されたのはJリーグがきっかけ。突然華々しく始まり、サポーターやホーム、アウェイ、オフサイドなどの言葉が広まった。日本のサポーター文化は海外のものがそのまま広まったので、受け身の文化。Jリーグのブームが落ちついて安定して、独自のサポーター文化が生まれつつある」。

サポーター文化が根づいた対照的なスタジアムがある。ひとつは、浦和レッズのホームスタジアム、埼玉スタジアム2〇〇2。日本一熱く激しいといわれるサポーターが、対戦相手を出迎えるときは、猛烈なブーイングから始まる。これが浦和レッズサポーターにとってのウエルカムホームのマナー。そうすることで、アジアで屈指の広さを誇るスタジアムを持つチームを守り、応援しているのだ。

川崎市　等々力陸上競技場。川崎フロンターレの本拠地として利用されている

一方、日本的なもてなし方をしているのが、フロンターレ川崎のホームスタジアム、等々力陸上競技場だ。試合時には必ず場内アナウンスで「今日は●●●の皆さんがアウェイサポーターとして来てくださいました。ありがとうございます」と放送される。そうすると場内に拍手が起こる。試合はなんとも和やかな雰囲気から始まるのだそうだ。

サッカーをサポーター視点から見ると違った文化が見えてくるから面白い。「どちらもサポーター自身が試行錯誤しながら作り上げてきた文化で、良い悪いはない。サポーター文化の違いを認めて実況していくことがメディアの仕事だと思う。そこから文化が成長していく」と、倉敷さんは話す。

「ただし、日本の場合、自前のスタジアムを持つチームは少ないので、各チームの文化が確立されるまでにはまだ時間がかかる。そこが、海外のサッカー文化との決定的な差だ」。

日本でサッカー文化を育てていくには、ハード面の充実度を高めていくことが大きな課題となるようだ。ソフト面では、「日本は、女性や子供も安心してスタジアムで観戦できる良さがある。そこに日本らしさをどうやって取り入れていくか。それによってチームの盛り上がり方が変わってくるだろう」と倉敷さんは分析する。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

“知らない”は伝える側の大きなチャンスとなる

映画や音楽、アートのように、サッカーはエンターテイメントとして成立するのだろうか。

倉敷さんに問うと、「スポーツは、エンターテイメントとしても無限大の可能性がある」とのこと。インターネットが広く普及した現代では、映画や音楽、アートは、それらに触れる前に簡単に情報を集めることができ、評判も分かる。しかしスポーツは、観戦しないと結果も内容もどうなるか分からない。そこに未知数の感動や驚きがある。
「未知数のものに人間は価値観を見出す。だから、スポーツだけが持っているエンターテインメント性は無限大の可能性を秘めている。その中でもインターナショナルスポーツのサッカーは世界へ展開することさえも容易にできる」。

エンターテイメントの先にある文化につなげるために必要なのは、歴史やそれに関わる人について知ることで、触れたい、体験したいという気持ちを起こさせることだ。海外で数多くのチームを取材し、その国の文化に触れてきた倉敷さんが実感したのは、海外では、小さな子供でも、何十年も前に活躍したサッカーの名選手たちのことを語れるということ。それは、古い映像を誰でも見ることができるからだ。

対して日本では、「Ｊリーグ草創期に活躍し今の基盤を作った、三浦知良、中山雅史、中田英寿などの名選手たちのことを知らない子供も多い」と倉敷さんは言う。古い映像が放映されるのも限定的で、その結果、「サッカー文化の歴史に空洞を作ってしまっている」と危惧する。

しかし一方で、チャンスがあふれているとも思うのだそうだ。
「今の若い人は、自分が興味あることに対してはとことん突き詰め、お金もかけるが、知らないことに対しては貪欲ではない。そこにチャンスがある。知らないことが多いのは、それだけ新鮮な感動と驚きとファーストインプレッションが用意されていること。知らないなら、こちらからいくらでも提供しようという形でサービスを展開すれば、可能性がどんどん広がる」。倉敷さんはそれを可能にするのが、技術の進化と規制緩和だと考える。

無限大に広がるサッカー実況の未来、キーワードは“細分化”

「僕は新しい時代の娯楽はデジタルスタジアムだと思う」と倉敷さんは言う。デジタルスタジアムとは、サッカースタジアムの高精細な映像や音声を屋内施設に再現するもの。第5世代通信5Gが広く商用化されれば、スタジアム以外でのリアルタイムの観戦スタイルが多彩になる。

「今、趣味は多様性を究めている。自分の好きなものを自由に選べる時代で、価値があると思ったものにはお金をかける人が増えている。そこにサッカーの未来があると思う」。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

そこから倉敷さんが見出す未来が、観戦スタイルの細分化だ。
「ひとつのサッカーのなかで、作り分ける。例えば、従来のオーソドックスな中継のほかに、データシステムを駆使して、試合中に瞬時に分析をしていく実況スタイル、試合の醍醐味をライブアクション的に絶叫も交えて伝えるスタイル、相手チーム側に立った情報を紹介していくスタイル、そして、僕が得意とする試合のはみ出し情報を実況に交えていくスタイルなど」。ひとつの試合で中継スタイル毎に複数番組を用意することで、それまで興味がなかった人も、自分好みのスタイルを探すことができる。さらに、これらを課金制にすれば、スポンサー側にも利益が出る。1試合から従来の何倍も収益が見込めるのだ。

5Gの活用次第では、課題とされているVARの使い方も変わってくる。現在は一度試合を止めて、審判がさかのぼって判断する材料だが、これが瞬時に判断できるようになれば、ブーイングも起こらないし、選手の覇気も保たれる。
「かつての日本代表監督、アルベルト・ザッケローニ監督が言った言葉がある。“スピードを伴わない技術は意味がない”。選手の技術もデジタル技術もスピードについていけないとこれからの時代はやっていけない」。

100年後のサッカーはすべてをつなぐアンテナになる

デジタルの進化を活用して観戦スタイルを細分化することで、サッカーのエンターテイメント性は無限大に広がりそうだ。さらに、5Gの普及で、あらゆるコンテンツが変わるだろう。
「観戦中に情報を見たいと思ったら、その情報に瞬時にアクセスできるようになるだろうし、観戦している人に試合の経過にあわせてクーポンをゲットできるようにしたり、飽きてきた人を判定して、『隣のチャンネルではリーガ・エスパニョーラの試合を中継中』と表示したり、スピードを伴わせて技術を生かすアイデア次第で楽しみ方は無限大に広がる」と、倉敷さんの期待度も高い。

「インターナショナルスポーツであるサッカーは、世界につながる言語としても大きな役割を果たしていく」と倉敷さんは考える。サッカーは世界共通の話題だからこそ、外交にも有効なツールになる。サッカーが強いということだけで、ビジネスパーソンが海外に出たときに仕事がしやすくなることも考えられる。スタジアムでも映像でも、新たな技術で人々にとってサッカーがより身近となる未来があれば、サッカーは世界中の文化を理解する入り口になるだろう。世界を瞬時にさまざまことをつなぐ、全ての技術を生かす為の共通言語になるのはサッカーなのかもしれない。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION

プロフィール

倉敷保雄（くらしき・やすお）

フリーアナウンサー。1961年大阪生まれ。ラジオ福島アナウンサー兼プロデューサー、文化放送の記者を経てフリーアナウンサーに。Jリーグの開幕と同時にサッカーの実況担当として、世界のサッカーリーグを担当する。J SPORTSの人気サッカー情報番組『Foot!』のMCを長年務めたほか、Jリーグから欧州各国リーグ、欧州CL、南米まで、手がける実況は広範にわたる。2002年日韓W杯では、スカパー！のメインキャスターとして日本戦や決勝戦の実況を担当。豊富な知識に裏づけされた的確な実況と遊び心のあるコメントで、コアなサッカーファンから初心者まで支持は厚い。サッカーファンの間では、「クラッキー」の愛称で知られる。サブカルチャーへの造詣も深く、BSスカパー！「忘れじのカルチャー倶楽部 クロッキクロニクル~タイムマシンに気をつけろ～」に出演。2019年5月にサッカーを題材にした初の小説「星降る島のフットボーラー」（双葉社）を上梓。ほかに著書多数。

Copyright (c) NTT COMWARE CORPORATION